福祉の背後にある客観的幸福－幸福の客観的諸条件としての「さち」と「さいわい」－

近藤良樹

1. 漢字の「幸」と「福」

幸福は、めぐまれた「客観的な状況」に対して、感情としての幸せ・幸福感をいだくことであろうが、本稿では、前者・幸福の客観的状況について見ていくことにしたい。まず、言葉の由来を手がかりにしながら、これを見ていくと、幸福の「幸」は、「さち」であり、「さいわい」と読まれ、「しあわせ」とも読んで、まさしく、幸福そのものを代表することばになっているが、この漢字の「幸」の組み立ては、かつて何が幸福であったのかをよく物語っているように思われる。一説では「幸」の上の部分「土」は、もとは、夭折の「夭」であって、つまりは、早死にを意味しているのだといわれる。そして、「幸」の字の下の部分は、「逆」の字の「しんにゅう偏」のないもので、逆と同じく、逆らう・反対するということのようである。したがって、その全体「幸」とは、「夭」に「逆らう」こと、夭折しないこと、つまりは、早死にしないで、生をまっとうすることを意味したもののようである。

かつては、多くが早死し夭折していた。人生の不幸は、何といっても夭折することにあった。人の幸福、「幸」は、まずは、いのちながらえることであり、健康で無事にということだったのだろう。いまでも、幸福な人生のための前提としては、とくに変わったことがなければ、誰でもが健康を想起することであろう。病気に苦しめられたひとは、まちがいなく、健康に無事にということをあげるのではないか。

しかし、われわれの現代では、健康や長生きは、幸福の前提にはなっても、必ずしも幸福そのものを意味するものではない。健康にめぐまれていることは当り前の時代になっているのである。それでも、というか、それゆえにというべきか、「早死」は、いまでは幸福の反対の不幸の代表格のものになる。「幸」が、夭折に逆らう長生きを意味していたということは、不幸とは、夭折することを意味する。多くが夭折していた時代には、この不幸は、ありふれていた。その反対の「幸」は、それこそ、まれに見られる恵みであり、たぐいまれな幸福だったのであろう。しかし、現在は、夭折の不幸は、あまりなく、この不幸にみまわれたものは、それこそまれな大不幸ということになる。「幸」は、その点では、いまは、否定的な「不幸」の方で直接生き続けているといえるのかも知れない。

他方、幸福の「福」の方であるが、これは、「示」偏に「富」であり、「富み」が「示し」出され顕在化していることをいうもののようである。「富」はというと、「ウ」冠は、大きな館を示し、そのなかの一・口・田の重なりは、高く大きなものに満ちていることとか、福々しいふっくらと

した酒樽を表しているのだとかいう。「福」は、豊かな富みに満ち満ちていることを示すもののようである。

ついでに、社会的な幸福を指す「福祉」にいわれる「祉」はというと、その「止」は、足・根本であり、止まる・充足する・安んじるということである。満たされて充足していることが「示」されている、顕著だということのようである。福祉の「祉」は、不足なく安んじており、穏やかに安寧にという、静かなささやかな幸福になるのであろうか。

「福」は、ひとことでいえば、「富み」になろう。「福の神」は、富みをもたらす神である。その反対の神は、「貧乏神」で、これにとりつかれたら「貧困」からぬけだすことができなくなるのであった。幸福は、その客観的なささえとして、「富み」をもつ。社会的な意味での不幸の代表は、「貧困」にあえぐことである。幸福の社会的な条件の筆頭は、いまでも、おそらくは、「富み」「豊かな財産」ということに、つまりは、「福」ということになるのではないか。そして、この「福」があれば、充足して安らかな幸福、「祉」(止=足りること)も可能になる。

「福」は、直接的には、豊かな物資に恵まれた状態をさすもので、それ自身精神的文化的な豊かさを語るものではなかろうが、拡大解釈するなら、そういう精神世界の「富み」をも含ませることができよう。「福」は、物質的精神的な豊かさに恵まれていることをいうのである。「幸」は、否定的な夭折に逆らうことであって、この字自体は否定的なもの一般に逆らい、これを無化するというものではないが、そういう方向を象徴しているものと見ておこう(「幸」は、手かせを表したものとの説もあるようで、それによれば、手かせをはめられる危険から逃れたのが、「幸い」という意味になる。危険・災いの無化である)。とすると、客観的にとらえられる「幸福」とは、わざわいとなるもの・否定的なものを排除し無化して(=幸)、豊かなめぐみ(=福)をいただいている状態をさすことになる。われわれの使っている「幸福」の言葉には、こんな意味を託しておいてよいのではなかろうか。

2.「さち」と「さいわい」

「幸」をわれわれは、「さち」と読み、「さいわい」と読み、「しあわせ」と読む。「幸せ」は、幸福の感情を表わし、主観的な幸福感の意味ももつ。「幸い」は、幸福感という主観的な方面の意味ではなく、客観的な幸福の方に限定して使われる。「さいわい」は、「さちわい」からくるようで、「さち」に基づくものになる。

「さち」は、海の幸、山の幸というように、富みとなるものだが、「獲物」の意味で、獲物が多いことであり、獲物をとる道具や、それの霊力を古くは意味したもののようである。「さいわい」は、この「さち」・富みが出現(「はひ(生)」)して、わがものになることであろうし、「さち」に出合い(「わい(合)」)、あるいは、「さち」をもちより「合わす」ことであろう。豊かな富みに出合い、これを持ち合わせて、満ち足りた状態にあること、これが「幸い」であり、幸福だということになるのであろう。

逆のものには、「わざわい」があげられようが、これは、「わざ」に、「合い」あるいは「はひ(生)」であろう。神々のなす行為・「わざ」であろうが、この「わざと」なす、いたずらな異常な事柄

について、それの生起に自分たちは運悪く出合い、有害な反価値の否定的なものを与えられてしまったということであろうか。この「わざわい」にしばられるところに、不幸が存在することになる。

「しあわせ」は、「仕合わせ」とも書くが、「為し合わす」ことであり、巡り合わせることである。それは、悪くめぐりあわすときも言ったようだが、いまは、よいものにめぐりあわすこと、さち・富みに運よくめぐり合わせて満たされている状態をもっぱら指すようになっている。さちに出合う「さいわい」と同一である。ただし、今日では、「しあわせ」は、幸福の客観的状態ではなく、主観的な幸福感を表現するものになっている。「さいわい」が、客観的な状態につかわれるので、「しあわせ」は、主観的な状態について使用されるようになったということなのであろうか(「幸いなことに日本晴れになった」と「幸せなことに日本晴れになった」の違いでいうと、前者は、客観的な事柄についてその偶然を「好都合なことに」といっているのだが、後者は、「うれしいことに」という主観的状態をふまえた発言になるのである)。

「さいわいにも」死だけはまぬがれたとは、「たまたま」「運良く」助かったということである。「さいわい」は、したがって幸福は、われわれに対して、たまたま偶然に豊かな富みが与えられていること、さち・富みの偶然的な所有を語っているということになりそうである。

「しあわせ」も同様で、さち・富みにめぐり「あわす」ものとして、たまたま偶然に幸福なことになるのである。この幸福の偶然性の特徴は、わが国のことばだけのたまたまのものなのかというと、そうではない。ひとの幸福には本来、偶然的に得られるものという特性があるのであろう、多くの言語で、幸福は、偶然的なたまたまのめぐみという幸運の意味をもち、幸福と幸運は、おなじ言葉でいいあらわされている。happy も、ドイツ語の Glueck、ギリシア語の eudaimonia いずれも、幸福であるとともに、運の良いこと、幸運を意味する。

ひとは、富みをもとめて努力する。しかし、それは、確実にえられるものではない。そのひとの力量がものをいうところは大きいだろうけれども、自分のうちにあるものを産み出すのでないかぎり、自分のコントロールのきかないところがかならずあり、思い通りにはいかないものである。ときには、自分の思う以上のものが獲得できるときもあれば、全然ということもある。

狩猟社会は、偶然にもてあそばれることが大きい社会であったろう。獲物となる動物は、本来的に動く物であって逃げていくものである。それを追いかけ、さがしだしていくのだが、それが獲得出来るのは、知恵と努力・勇気とともに、偶然が大きな働きをしたことであろう。「さち」がえられる「さいわい」は、「さいわいにも」という偶然のめぐみ、幸運によるものであることがしばしばであったにちがいない。

農耕社会では、より確実なさち・富みが獲得可能となった。それでも、天候に左右され、とくに稲作では大雨とかんばつの偶然に支配されるところが大きかった。しあわせな実りがえられるのは、意地悪な神々の「わざわい」を避けることのできた「さいわい」な幸運な時にかぎられていた。

現代社会では、その経済的な富みは、必然的に獲得できるもので、「さいわいにも」たまたまめぐまれて得られたということにとどまるものではない。偶然的な、幸運な「さいわい」なこと

ではなく、幸運とは無縁の、(必然的にもたらされる)幸福・富みとなったように見える。しかし、かりに総体としての社会はそうであると楽観的にとらえられるとしても、幸福を求める個人のレベルでは、その人生には、「運」がつきもので、必然的にもたらされる幸福というわけにはいかない。各人の個人的な生活は、生まれにはじまって、たまたまの出合いに満ち満ちていて、偶然ぬきにしては語りえないものになっている。「さいわいにも」大きな事故にならずにすんでとか、「ふしあわせなことに」親会社の倒産にまきこまれてと、当人の関知しないところからの、たまたまの運・不運にひとは、ほんろうされつづけているのである。「さいわいにも」「しあわせにも」という偶然のめぐみは、しっかりと生きており、幸福は、やはり、偶然的な面をもつ「さいわい」であり、「しあわせ」なのである。

3.天与の「めぐみ」

幸福は、「さいわい」として、幸運、よい運ということでもあったが、この「運」とは、主として人間的なことがらにかかわる問題について、それを規定し方向づけ決定していくものが不明で、おそらくは本質的には偶然によると思われるものについて、これを偶然としないで、人知を越えた天の命・天の決定とし、天がすでに必然性をもって巡り合わせを決定していると考えようとするもので、その運のよいめぐりあわせが、幸運であり、天からのめぐみとなる。この天からのめぐみは、与えられるものであるから、幸福は、偶然的なものであるとともに、その点においては、受動的にいただくもの、受用するものとなる。

幸福は、一面では、さち・富みを獲得していく能動的な働きのもとにある。だが、他面においては、偶然的に与えられるもの、めぐみとしてあるのである。アリストテレスも、この点を問題にして、幸福は、自分の実践努力(askehsis)で得られるものか、神与のもの、運 (tucheh) によるものかと問いをたてている(註 1)。

人の人生は、個人が自らこれを創っていくのだとしても、ときの社会なり歴史のもとにあり、そとからの多大の影響・ささえなくしては、存在しえない。自身の獲得の努力は大切なことであるが、多くは、そとから与えられるものによっているのであり、それも、めぐりあわせで、たまたまにという偶然性の形式をとることが多い。さちは、富みは、多くは社会から歴史的に与えられているのであって、われわれ個人は、創造もするが、主要には、そのめぐみを享受することになっているのである。

「めぐまれる」とは、幸運を与えられる、さずかることであるが、「めぐむ」方はというと、愛しいと思い、いつくしみ、あわれむのであって、めぐみをうける方に比して、圧倒的な強さ・高さをもっている。「おめぐみ下さい」とめぐみをもらう方は言い、「めぐんでやれ」とめぐむ方は言うように、めぐまれる方は、無力で、価値あるものをいただくのみであり、めぐむ方は、それに対して絶大な力をもっているという関係になる。無力なもののあいだでは、このめぐまれた者は、うらやましがられる、希有の「さち」を手にした「さいわい」な者であり、幸福者になるのである。この場合の幸福は、めぐみとして、偶然(あるいは、天なり神)の絶対的な力によってさずけられた幸運となるのである。それは、人が創造するものではない。ひとは、ひたすら受動

的に受用するのみであり、享受するのみのものとなる。

「めぐまれる」とは、まわりの人には与えられていないのに、自分だけが幸運を、幸福を与えられていることである。それの与えられることは、単なる偶然でしかないこともあれば、周囲の人々の特別の好意によってのこともある。わがものとなっている富みを、たんに「さち」と捉えるのではなく、「めぐみ」と捉えることは、これを、自分に特別に与えられたありがたい「さいわい」なものとみなすことである。まわりに比べて、特別になさけをかけてもらい、慈しみをうけ、よい境遇・状況を与えられた「めぐまれた」、つまりは幸福な存在であると自身を捉えることである。

闘争・競争に生きるひとのなかには、「しあわせ」とか「幸福」というようなことばを聞くとゾーッとし、このことばに不快を感じる者がある。能動的行動的に生きているものにとって、幸福が創造でも能動でもなく、富みを享受し受用することをもっぱらとする、しばしば甘えた反創造・反活動のものでしかないと思えるからであろう。めぐみをいただくものとしての幸福には、確かにそういう面がある。

豊かな富みを前に、不服・不幸づらをしている者に比していえば、それを「めぐみ」ととらえ、希有の幸運としてこれに満足し自らを幸福とする者は、謙虚であり、おのれを知るものであって、立派である。ただ、そこには、挑戦的積極的な創造的態度ということでは欠けるものが感じられなくもない。しかし、「さいわい」を求め、「さち」を獲物を追い求めるもともとの態度は、闘争的能動的であろう。幸運・偶然のまえで無力な人間は、「さち」を「めぐみ」と謙虚に捉えざるをえないのだが、「さち」を追い求める果敢な行動は、「さいわい」を追求する者の本源的なすがたは、積極的で創造的といってよいのではないか。

さきほど、アリストテレス『ニコマコス倫理学』が幸福は、実践努力によるものか運命・神与のものかと問題にしているといったが、彼は、幸福 eudaimonia(eu 良い-daimonia 神・運命)とは、eu zehn(良く生きること)であり、eu prattein(良く行なっていること)だとも言っている(註2)。単に天から幸運を授与されるのみではなく、自身において能動的に、よく生きることであり、よく実践することであると、能動的な幸福をいうのである。あるいは、彼は、幸福な人とは、「外的なよいもの」に恵まれている人、つまり幸運を享受し、めぐみをいただいている人であるとともに、行動的積極的な存在としてあって、「まったきアレテー(=卓越性=徳)に即して活動している」ひとだとも論じている(註 3)。そして、幸福に決定的なのは、運ではなく、「アレテーに即しての活動(energeia)」だというのである(註 4)。

幸福は、「さち」を自らが追い求め、能動的に積極的に「さいわい」を勝ちとっていくところに存在し、かつ、人知と人力を越えたものに関しては、その「めぐみ」をいただいて、「さいわい」を見い出す、受用的・受動的なものなのでもあろう。幸福は、能動・受動、積極的獲得・消極的受用の両面をもつというべきであろう。

4. なにが「さち」か。

幸福は、「さち」・富みを手に入れた「さいわい」に成立するが、この富み・さちは、富み一般

であればよいのではない。ギリシア神話のなかのミダス王は、ディオニュソス神からあらゆるものを光かがやく黄金にかえてもらうことにしたが、このもっとも普遍性をもつ富みも、それだけでは、各欲求・欲望にかなうものではなく、それではとうてい幸福にはなりえなかった。ミダス王が早々にその願いを取り下げたことはいうまでもない。富みがわれわれの幸福をもたらすためには、各欲求に見合う個別的な価値をそれがもっていなくてはならないのである。

カントは、幸福とは、「あらゆるものが望みや意志どおりにいっている alles nach Wunsch und Willen geht」ことだと言っているが(註 5)、欲求・欲望は、特定のものの不足を前提にしており、その不足を解消できる価値物を所有し、これで欲求を充足し満足するところに、幸福は可能になる。単なる富み・価値物ではなく、各自の求めている特定の富み・価値物を獲得し、これを「めぐみ」と受け取って、享受するところに「しあわせ」が可能になるのである。

ふるい時代になればなるほど、欲求・欲望は共通で、生にとって基礎的な衣食住にかかわるものが、求められる富み・さちとなっていたことであろう。「幸福」は、夭折しない「幸」と、豊かな財産を示す「福」からなっていた。健康で長生きで、しかも、経済的な富みにめぐまれていることであった。福の神は、お金持ちにしてくれる神であり、その反対は、「貧乏神」で、「貧困」をもたらすものであった。しかし、そういう富みが簡単に充足可能となるとともに、そのうえになにを富み・価値とするかは、個人によってそうとうに異なることとなってきた。経済的な富みにそっぽを向き大富豪の息子が自分の幸福をスラム街にいきることに見い出したり、未開の地での冒険的な生活に見い出すようなことがある。多様な精神的文化世界の展開とともに、幸福への経済的な富みのウエイトは、一般的に小さくなることとなった。

近代の資本主義世界は、一方の資本の側に巨万の富みを集積し、他方の労働者や失業者たちには、貧困を蔓延させた。それにともない福祉(=幸福)対策がとられていくこととなったが、そのはじめは、経済的な富み・財貨をすこしでも多く貧困階層のところへと配分していくことが、主要な福祉対策・政策となっていたといえる。とくに急進的な党派の解決策は、革命によって、資本に集中している富みを国家の責任で労働側に配分して、福祉=幸福を労働側に実現しようとするものであった。だが、その試みは、社会主義諸国においては、逆に貧困と不幸の普遍化に終わってしまい、挫折してしまった。これに対して、改良主義的な人々の努力のもとで、福祉政策を充実させていく方向において、一定程度労働側への富の分配は実現されていった。それは、福祉国家といわれる北欧やイギリスなどにおいて、かつてに比較すれば夢のような規模で、十分に実現されることになった。わが国も、おくればせながら、働く一般国民の経済的な豊かさということでは、以前とは比較にならないほどに、めぐまれることとなっている。

だが、福祉が充実し、経済的に豊かになってきたのに、そういう先進的な国々の国民は、かならずしも、幸福(=福祉)に満たされているとは感じられない状態にある。経済的には先進的なはずのわが国であるにもかかわらず、国民の現状への不満は高いといわれる。経済的な豊かさだけでは、幸福にはなれないもののようである。

福祉(=幸福)の充実度は、一方では、客観的なもの(富とか健康)をもってはかられる。だが、肝腎なのは、いかに幸福・幸せと感じることができているのかということになるから、他方では、

福祉享受の主観的な満足度をもってはかられることになる。幸福を可能にするものは、一般的に言って、単なる「さち」・客観的な富みにとどまるのではなく、それが同時に、当の主体の各個別的な欲求・望みを満たしてくれるものとなるのでなくてはならない。配慮される富みは、そういう具体的な特殊な「さち」として、当人に「めぐみ」となるものでなくてはならない。

その場合、富み・さちという客観的なものと、満たされることを求める各欲求・望みという主観的なものについて、幸福にとって中心になるのは、主観的なものの方にあるというのが、おそらく、世の幸福論者の多数派になる。そのひとり、B.ラッセルは、自身の幸福論を『幸福の獲得』(1930 年)と題しているが、かれは、幸福が一方では、めぐまれた環境としての客観的な富みに依存するとともに、他方では、自身の満足度、自己自身の考え方に大きく依存していて、豊かな現代社会では、多くのものは、後者しだいで幸福になれるのだ、自らの幸福獲得への態度そのものが問題なのだとして、その書名を「幸福の獲得 The Conquest of Happiness」としたのであった(註 6)。客観的には恵まれている現代人の多くが不幸であることをふまえて、そうであるなら「万人を金持ちに」したところで何になろうとラッセルは言い(註 7)、なにより幸福にとって大切なことは、心を改めること、自己閉鎖をやめて、外の多彩な世界へと飛び出して、楽天的に生きる努力をすることだ(註 8)、そうすれば大方は幸福になれるはずなのだと論じている。

いくら客観的に社会的に大きく評価される富みであっても、それが当人の欲するものでないとしたら、それは、幸福に資するものとはならない。逆に、いくら客観的には低い価値しかもたないとしても、場合によると、客観的な富みとしては無価値であっても、それが当人から「めぐみ」と受け取られるならば、それは、幸福に資する希有の富み・さちとなる。ショーペンハウアーも、幸福について、客観的な富みという側面と、これを反省し感じるところの主観的な側面とに分けながら、「われわれの幸福には、・・・主観的なものが客観的なものにくらべて、比較にならないほど本質的だ」(註 9)というが、いくら客観的な富みをもってしても、それだけでは決して幸福にはなれないのである。肝腎なのは、それを反省・総括して、豊かなめぐみとして捉えて、これに満たされたものを感じることのできる主体があることである。

5.無もまた「さいわい」

ショーペンハウアーは、苦痛・苦悩のないことに、無に、幸福を見い出した。苦痛は、意志の妨害としてあり、この苦痛は、「積極的に感覚され」、それのないことに安らかな幸福はなるといい、「苦痛の非存在 Abwesenheit が生の幸福の尺度である」という(註 10)。それは、かならずしも、経済的に無価値というわけではないが、たとえ、そういう無価値なものであっても、それが苦悩を無化するのであれば、それこそが幸福だというのである。富みが財産があればあるほど、人はこれにとらわれ、これを心配して、苦悩をもたらすものとなることが多い。とある資産家が宗教者となって出家することにしたのだが、かれは、もっている財産をすべて焼き捨てた。そのとき、周囲の者が「貧しい人達に分け与えたらよかったのに、もったいない」といった。しかし、かれは、「財産・富みが苦悩・不幸の原因の最たるものなのに、どうしてそんな苦悩となるものを分け与えることなどできようか」といったという。

一般的に言って、「わざわい」のない状態は、それ自体としては、客観的な富みでも「さち」でもないけれども、主観の方から、これが「めぐみ」と捉えられるなら、ありがたい安らぎであり、幸福とみなされることとなる。苦痛・苦悩がなくなった無の状態は、これに慣れると単なる「無」でしかなく、ごく当然の事柄となるが、ふつうの人にとっても、それから解放された当座は、この無は、「めぐみ」であり、「さいわい」と捉えられて、幸福と感じられることであろう。

ひとは、幸福と感じるには、その人のおかれている状況なり、求める対象について、これを「めぐまれていて」「さいわい」なことと反省し評価できるのでなくてはならない。そうとらえられるのであれば、客観的な事態そのものは、(ふつうには、富みが「めぐみ」とみなされるのであろうけれども)場合によっては、無であろうと、マイナスの価値・反価値物であってもよいのである。苦労こそが幸福につながるとしたら、マイナス状態が「さいわい」「めぐみ」と捉えられることになる。豊かな富み・財産は、人を駄目にすることが結構ある。富みがあると人はそれに執着し心配のたねとなりがちである。「無一物」である方がよほどやすらかになれる可能性がある。そう思う者には、無は、大いなる「さいわい」となるのである。

幸福は、生の個別的な事態に逐一対応したものではなく、幸福な「人生」とか不幸な「青年期」というように、一定のながさをもって、まとまりのある時間について、生の一全体について言われるのが一般的である。幸福をもたらす「さち」富みや「めぐみ」は、これに応じているものとしては、持続的なものとなっていることが求められる。「幸福な生涯」をささえる「めぐみ」が経済的な富みであるとしたら、その富みはその人において、一生持続しているのでなくてはならないであろう。

客観的な富み「さち」が、幸福となる人には、ありがたい「めぐみ」と捉えられて、「しあわせ」幸福をもたらすのだが、富みは、持続しているのに、その富みが当人にあたりまえとなり、ことさら「めぐみ」とみなされなくなると、幸福とは感じられなくなる。健康でも、病気から解放された当座は、その「めぐみ」に幸福感をいだいても、それになれてしまい、それが当り前になると、健康は持続しているのに、もう幸福とは感じなくなるものである。とはいえ、自身をふりかえり、周囲のものと比較したりすると、自らの恵まれていることを再認識・再自覚できるから、そのさち・恵みの持続しているかぎりは、幸福感を反復することは可能である。幸福は、求められるものであるよりは、生の活動のなかで「ふと随伴する」ものだといわれることがある。持続する幸いな客観的な状況のもとで、何かにふれて、これを反省・自覚して、ふっと幸福感をもつのである。

反対の「不幸」も、似た事情にあるといえよう。不幸をもたらす「わざわい」は、克服の対象となるから、意識される機会も多くなって、「不幸」は、めぐみの幸福よりは、慣れにくい面はあるが、くり返されるなかでは、やはり、慣れてきて平気になって、不幸と感じなくてすむようになるものである。もちろん、幸福と同様、これを意識し再認識する機会があれば、その感じなくなっている不幸の感情を反復することになるのはいうまでもない。日頃は忘れていた不幸なのだが、町で親子が楽しそうに買い物をしているのを見てほほえましく思いながら、ふと、夭折した我が娘のことを想起して、自分の家庭的な不幸をしみじみとふりかえるのである。

客観的に「さち」富みが持続しなくなると、幸福も維持できないことになるのだが、場合によると、それがなくなっていても、その「めぐみ」の影響力を感じ得ている場合には、そのめぐみは主観において持続していることになり、幸福と思うことが可能である。吉田松陰の塾生たちは、わずかの期間教えをうけたにすぎないが、その圧倒的な影響力は、いつまでも残った。精神的なたぐいまれな「さち」を与えた松陰自身はいなくなっても、その「めぐみ」は、塾生のうちに希有の師に出会えた「幸福」を持続させてくことが可能だったのではないか。逆の不幸のばあい、幸福以上に、一回きりの、ほんの一時の「わざわい」がこころの中には長く影響しつづけ、不幸を持続させるものである。欲求を満たす対象(客観)がなくなってしまうと、欲求は、幻想を糧にしないかぎり、ただちに不満足となって幸福感などいだけなくなる。しかし、不幸をもたらす、欲求の対象の喪失という事態は、欲求のあるかぎりは(つまり客観の変化に見合うように、欲求を変え、これをなくしてしまわないかぎり)、その不満足を持続させることになり、痛みを不幸を感じさせつづけるものである。一回の失恋の不幸は、想いをかえ、恋する相手を変えないかぎり、いつまでも、この不幸を持続させることになる。

幸不幸をもたらす「さいわい」「わざわい」は、客観なり主観において持続するものだが、それは、時には、主体の変動とともに、逆転して解釈されていくこともある。ときが移れば、かつては「わざわい」と思っていたものも、それによって鍛えらることがあると、「わざわい転じて福となす」となり、わざわいではなく、「さいわい」であり、「めぐみ」であったと解釈しなおされることがある。白隠は、「南無地獄大菩薩」といった。この世の地獄・苦悩の体験が安らかな悟りに向かわせる機縁をつくってくれるということで、わざわいとしての地獄の体験は、むしろ、さいわい・めぐみにしていくことができるのである。生じた過去の客観的な事態そのものは、変わらないで記憶に持続することであろうが、それへの、幸不幸に関わる「めぐみ」か「わざわい」かというような解釈そのものは、当の主体の成長変化とともに変動する可能性をもつ。持続的に影響力をもっていた一つの解釈は、その主体の変化とともに変わることになり、以後その新解釈のもとに、持続的な「めぐみ」なり「わざわい」として存在して、幸不幸のための決定要因となりつづけることになるのである。

6. どうして「幸せは、かなたにある」というのか

幸福は、しばしば「かなたにある」ものと言い表されてきた。歴史をふりかえるならばいたるところ悲惨なことがらが満ち満ちていて、幸福な人生をまっとうできたひとは少なく、たしかに、幸福は、多く、「かなた」に憧憬されるものにとどまっていたのかもしれない。しかし、健康にも富みにもめぐまれている、つまり幸福の条件は十分にあるこの現在の我が国であっても、幸福と思っているひとは、かならずしも多くはない。不平不満に終始しているものが目立つような気がする。いつまでも幸福はかなたへと先延ばしされていく傾向があるようである。

幸福がこの現在にはなくて、未来へ、かなたへとむけられるのは、ひとつには、われわれの欲求・欲望のありかたそのものにその原因があるのであろう。欲望をひかえめにした清貧の精神に立脚するならば、豊かな現代社会のふつうの人であれば、ありあまる富みのもとに満足でき満た

された気持ちになって、恵まれている幸いな時代だと、幸福を感じることになるであろう。だが、われわれのこころは、一般的にはそういうあり方をしていないのである。大量生産・大量消費の体制にくみこまれていて、コマーシャリズムによって欲望がかきたてられ、不満足状態が意識的につくりだされているのである。その不満足状態がつづけば、当然、幸福とは感じられなくなる。

ひとの欲望は、向上・進歩を生き方の根底におく場合、同一の欲望対象にとどまることをいさぎよしとしない。欲望をみたすものが得られると、それが新しい獲得物「さち」とみなされている間は、この「さいわい」によろこび、満足を感じるのだが、これに慣れてくると、当然のこととなり、よろこびも満足も感じなくなる。犬や猫は、ずっと同じえさであっても、これが与えられるならば、一生、そのたびに大喜びをしてくれる。だが、ひとは、同じものには、飽いてしまい、よろこぶどころか、やがては不平不満をいいだすことになる。べつの新しいものが欲望の対象となる。それは、向上・進歩するためには、大切なあり方になるのだが、よろこび・満足・幸福の感情をもつことは、それだけ少なくなってしまう。同じえさに毎回大喜びの犬や猫のまえで、ひとは、おのれのどん欲さを反省してみるべきではないか。

なにかを獲得して満足しても、すぐに、欲望は別のものを求め、不満足状態におちいる。幼児でも、人の場合、どん欲であって、わがものにしたおもちゃには、すぐに飽いてしまい(向上・進歩にはよいことなのだが)、ひとのもっているおもちゃをうらやましがり、これを奪おうとする。求めていたものは獲得したとたんに欲望の対象ではなくなり、別の獲得できていないものが欲望の対象となる。いわゆるドンファンの傾向をひとはもつ。憧れの異性をわがものにすると、それは、もはやあこがれではなくなり、別の異性が新たな憧れとなる。自分のこころ(欲望)を満たすものは、自分の手許にはなくて、常に、かなたにあるということになるのである。

満たされているはずなのにそう感じないとは、鈍感ということである。われわれは、「幸福である」と知的に反省できても、すなおに、それを「しあわせだなあ」と実感するところまではなかなかいかない。人の知性は、感性的な束縛から離れて高く飛翔していき、感性は、おのれの知性から疎外されがちである。幸福だと知性は判定できても、幸福感にまで進んでいかないわけである。この、幸福感情への鈍感さも、「しあわせは、かなたにある」との言葉をもっともと感じさせることになっているのかもしれない。

ところで、現在のこの現実には、不満足で、かなたに恵み・幸いを求めていくという姿勢は、端的には、「未来」に、そして、ここにではなく、遠くの未知の場所としての「かなた」にと幸福をもとめ描いていくこととなる。そこでは、さらに、幸福が描かれやすくなる別の要因も存在していて、一層、未来・かなたは、幸福の場となりやすくなっているのである。未来は、ここには存在していない。人がもっぱら想像力にたよって、これを抽象的に描きだすものになる。その場合、現実ならば、それに否定的なものが附随するのだが、それがほとんど想起されることがないので、この未来の幸福図は、純粋にバラ色に美化されて現れてくることになる。想像力の貧しさが未来をバラ色一色にするのである。

現在の現実の場合、ひとは、具体的に良いものも悪いものも、すべて公平に意識することになる。むしろ、苦痛となるものなどの否定的なものが過大に意識される傾向をもつ。ということで、

現実は、その具体的で多彩な諸側面をしっかりと見させてくれるので、単純にバラ色一色にはなりにくいのだが、未来のかなたのものは、抽象的な想像図によるので、一面的に誇張した幸福が描かれうるキャンバスとなるのである(過去のことも、この未来とおなじく、想起されて、想像されるものとして、良いこと悪いことが一面的に抽象され誇張される世界である)。

さらに、未来は、過去とちがって、いまだ不確定で存在せず、それを存在させ確定することには自分が関与できることがある。ここでは自分の意志を働かせて、望ましいものが実現でき、幸福の状態を自らがつくり出せるのである。しかも、自分の幸福な目的の達成に対する妨害は、未だ未来のことがらとして現前していないか、または、そういう否定的なものを想像に組み込むことはあまりないので、ひたすら自分に都合のよいものに沿った未来図をえがいて、思いどおりのものの実現を想像でき、満足をえることができるのである。「さち」を獲得しようと目的を描くとき、災いに出会うことはもちろんのこと、偶然に左右され、たまにしか「さち」に出会えないことなど忘れていて、ひちすらに、さちにであう幸いのみを思い描くのである。実際に、望みの達成に向けて踏み出すと、とたんに様々な妨害や障害「災い」が生じてくるのだが、それが、想像図のみの未来世界には、生起することがあまりなく、幸福の達成だけが一面的に抽象され誇張されて、これを夢見て楽しむことができるのである。

未来は、われわれの意志の参与をもって成立するものとしては、よい意味でも「幸せはかなたにある」のである。この現実のみじめさにつぶされそうになったとき、未来に希望をいだくことができるならば、その危機を乗り切る勇気がわいてくる。過去の不幸は、もう変えようがない。だが、未来ならば、自分の意欲でこれを幸福なものにと作りなすことが可能である。現実のみじめさに落胆し生きる意欲をなくしているとき、襲いかかる苦難に絶望しこの生をあきらめかけているとき、ひとは、それがたとえ幻想にすぎないとしても、未来の、かなたの幸福の想定に、希望と勇気を得ることができるのである。

抽象的に一面化してということでは、不幸も、未来に対しては、誇張して描かれることがある。悲観的なひとは、体験中の現実のもとでは大したことではないと納得していても、具体的な情報が欠ける未来に対しては、その悲観的傾向を存分に発揮して、悲観的なもののみを一面的に誇張して、「杞憂」のことわざのとおりに不幸を先取りしてなげくことができるのである。こういうひとに対しては、「案ずるより、産むがやすし」という言葉をわれわれは用意している。悲観的なひとは、あまり夢を見ないで、現実を見つめる方がよい。悪夢からのがれるには、現実にもどるのが一番である。

抽象的にしか捉えられないということでは、未来とともに、この現在のもとでの未知の世界、かなたの世界もまた、同じことになる。ここでも、想像によって抽象的な図が描かれる。一面的に都合のよいもののみが想像されるのである。現実には、多様な欲望があり、苦しみが伴うものだが、それらは、かなたの未知の世界の想像では、ほとんど無視される。その想像においては、些細な事柄や日常的なものは、つまり、トイレにいきたくなるとか、お腹がすくとか、蚊に悩まされる等のことは描かれないから、それらの苦痛は存在しなくて、よい面のみを展開できる。抽象的なかなたの想像では、現実的な厄介な諸欲求をも抽象し、わざわいなども捨象しているので、

ひたすらに幸福のみの世界となりうるのである。

遠くの景色は、きれいである。となりの芝生は、きれいである。きれいなのではなく、きたないものが見えないのである。否定的なものが見えないということである。日本にいると、日本のきたないところは、しっかりと見える。むしろ、きたないところは、なんとかしたいところだから、ことさらに、注目されさえする。だが、南極の美しい白色の大地の写真では、きたないところは、見えない、聞こえてこない。現実に住んでいるところでは、諸種の欲求・欲望が平行的に存在していて、うるさくひとをなやませる。だが、想像の南極の世界に入り込んでも、われわれは、それらの欲求は存在しないか、抽象的にしか働かないので、南極は寒いはずで、それは、いやだと思っても、そんなにひどい辛いものとは感じない。凍傷のことを想起したとしても、そんなに痛みを感じたりするわけでもない。静寂の白い大地と紺ぺきの大空のしたで、酷寒の辛さなどどこ吹く風と、しあわせなひとときをすごせるのである。

かなたの、未来・未知の世界を構成するのは、想像力で、この想像では、随伴する否定的なものを捨象しているのだが、さらに厳密にいうと、想像力は、捨象・抽象するというよりは、いくら具体的に描こうとしても、その能力がなくて、これを描くことができないのだというべきである。想像の図は、感覚や夢の描くような個別的で受動的な具体像ではない。それは、普遍的概念的なものにたよって、能動的な知性の創作する抽象的な図式になる。ひとによっては、想像図において、感覚像と同一の具体的なありありとした直感図を描けることもあるようだが、想像図は、一般的には、希薄になった感覚図などではなく、知性の抽象的な概念によっている抽象的な、概念図と感覚図の中間に位置する図（カントにならって「図式」といいたい）になる。想像図は、感覚的な所与ではないから、各人の知性が自らに創作していかねば成立しない。それは、知性的な一般的な概念によっていて、感覚的具体性をもちえず、抽象的な図しか描けないのである。たんぽぽの想像図を描いたとしても、一般的抽象図にとどまって個別具体的な図にはなりえず、感覚像でなら何でもない、その花びらの枚数を数えるということすらできないのである。現実のなかの幸福の、感覚的なものを含む個別具体像ならば、そこに同時に、多様な具体的な妨害・苦痛などもあわせもつ。だが、想像のなかの幸福図では、それらの具体的なものを持とうとしても、持つことができないのである。幸福を形成する諸概念によって想像された幸福図は、ひたすらに幸福となるわけである。

ところで、幸せは、かなたにあると言われる場合、他人がかなたの存在そのものとみなされることもある。自分は不幸だが、周囲のひとは、幸せそうに見えるということである。これも、ひとつには、かなたの人の不幸、他人の不幸は、見えにくいということによってそうなるのである。

幸不幸は、こころにいだくものとして、そとから見ただけでは、いずれとも判断つきかねる。こころにあることがそとへ表現されるならば、それは明確に判断できる。しかし、ひとは、自分の不幸を他人にはあまり知らせようとはしない。むしろ、他人には不幸であることは、隠すのがふつうである。幸福そのものと思われているひとが、意外に不幸であることが判明することがある。そのひとにとって不幸な事柄となるものを、例えば、巨額の借金を背負い込んだり不治の難病をかかえて悩んでいることを、近所のひとすらも知らなかったというようなことがよくあるも

のである。自分の不幸やその原因となっているものを吹聴することは、そのことで大きな利益がもたらされるような場合は別だが、そうでもなければ、誇れることではないから、あまりしないであろう。できるものなら、ひとには知られたくないと思うのが普通である。ということは、不幸などどこにもなくて、したがって、幸福に見えているひとも、隠しているだけで、ほんとうは不幸を背おっていることがけっこうあるということである。

また、自分の不幸・苦痛の場合は、常にこれが意識され、忘れられず、つまりは不幸を自覚することになるのだが、同じ苦悩でも、ひとのものならば、実感はなく、すぐわすれたり、なんでもないものとして、この不幸を見のがすことも、ひとが幸福に思える一因になる。

さらに、幸不幸を外見から判定する場合、健康とか財産状態等、幸福の外的な条件「さち」をもってすることも、ひとを幸福にみなしやすくすることとなる。健康にしても財産にしても、それに慣れてしまえば、幸福とは感じなくなる。そのことは、自分についてならば、周知しているのだが、ひとについては、そういうことを配慮しないのである。ほかに手軽に推定できる手段がないから仕方がないといえばそうなのだが、「あれだけの財産があれば、当然幸福なはず」とかってに思い込むのである。

未来・かなたは、特別に幸福なものがある場所なのではない。不幸や否定的なものが見えにくくなっているのみなのである。幸福を彼方に描き出し、これを訪ね歩く、メーテルリンクの例の幸福の『青い鳥』では、主人公たちは、かなたのそれらしき諸世界に幸福の鳥をもとめてさすらったが、そのどこにも、これを捕まえることはできなかった。だが、彼方の世界から家に帰ってみたら、なんと、その幸福の青い鳥は、自分たちのそばに、手もとにいたのであった。この現実にこそ、幸福はあったというのである。

近代人の欲望は、無際限的で、求めるものを獲得したら、すぐにつぎの別のものを求めていく。この欲望のもとでは、かなたへかなたへと満足・幸福はのがれてしまうのであった。だが、その欲望をささやかなものにとどめるならば、清貧の精神にたつことができるならば、もう十分に恵みは与えられており、多くのひとは、いつでも、現実のもとに幸福を感じることが可能なのである。かなた・未来に、幸福があり不満足がないのは、現実的諸欲求がそこには存在しないで捨象されているからであった。否定的なことが見えないからであった。とすれば、欲望を肥大させることをやめ、否定的なものにとらわれず、ささやかなことがらに恵みを感じる、寡欲・清貧の姿勢をとるならば、いつでもこの現在の現実のもとに、幸福は実現できるということである。幸福の青い鳥は、無欲・無心のものの手のひらには、いつでも舞い降りてきているのである。

註

1)アリストテレス『ニコマコス倫理学』1099b 参照(以下、ベルリン・アカデミー版(Bekker 版)のページづけのみを、慣例にしたがって、略記する)

2)cf.アリストテレス『ニコマコス倫理学』1095a

3)アリストテレス『ニコマコス倫理学』1101a

4)アリストテレス『ニコマコス倫理学』1100b

5)Immanuel Kant; Kritik der praktischen Vernunft. 1787. S.224.

6)cf.Bertrand Russell; The Conquest of Happiness. 1930. Chapter16.

7)cf.Russell;ibid. Chapter1.

8)cf.Russell;ibid. Chapter17.

9)Arthur Schopenhauer; Parerga und Paralipomena. Aphorismen zur Lebensweisheit. Kapitel 1.

10)Schopenhauer; ibid. Aphorismen zur Lebensweisheit. Kapitel 5. A.

平成 10 年 11 月　　『HABITUS』(西日本応用倫理学研究会) 1998 年 11 月号　9~24 頁